

経済史研究の魅力 について

21世紀も4年目を迎え、社会の様々な部面で「転換」という言葉が聞かれます。物事をどう考えるか、と改めて考えた場合、時間軸と空間軸は思考の基礎であり、その柱の一つである歴史に立ち返って考察することは様々な思考の基本の一つです。そこで、今回の対談は経済史研究に携わっておられる西川先生、太田先生、市川先生に、その経済史研究の魅力と意義について語っていただきました。

日々の経済活動を追うことは一人一人の意思とは関係なく客観的な状況をつかむことにつながる

市川／私が経済史の研究をしたいと思ったのは、まず歴史一般を考える場合、政治家が残したものや様々な要職についた人の残したものが、それにもとづいて歴史を考察するのですが、日記を残したり自分の記録を残したりする人は、人間の人口の中では決して多くない。じゃ、みんながつくってきた歴史というのを考える場合、明治の人間、たとえば農民一人一人や一般の庶民も含めて、彼らが何を具体的に考えて行動したか、を彼らは文章に残していないのですね。そもそも文章を日々書くことが習慣ではない。

でも、経済は一人一人が日々生きてれば関わっていることです。だから、たとえば数字を追うことは顔が見えない研究に思えるけれど、文字を残した人々よりも広い範囲の人々の研究をできるんじゃないか。文字を残す場合、人に見られることを考え、示したい、残したい、という意図が働いています。客観性にもとづくというよりは、示したいということを書き残しているから、そのまま信用することはできない。しかし、日々の経済活動を追うことは一人一人の意思とは関係なく客観的な状況をつかめるんじゃないか。経済史をやってみたいと思った理由はそういうことです。実際に研究をしてみると、そうはうまくいかないんだな、と感じてますが、そういうことで研究に入りました。

非常に抽象的な理論研究を除けば、社会科学・経済学はすべて歴史研究

太田／僕は、非常に抽象的な理論研究を除けば、社会科学・経済学はすべて歴史研究だと思います。例えば、最近の北海道を論じるのも歴史的に論じるしかないし、農業経済でもそう。その意味で社会科学は歴史研究だ、と思います。

その中で、ひとつのジャンルとしての経済史を考えると、きわめて個人的な見解ですし、また西川先生とも違うけれど、狭い意味での経済史研究には二つのメルクマールがあると考えます。まず、ひとつは、研究対象に直接関わっている人たちが、もはや生存していないこと。生存者がいると研究にバイアスがかかってし

まいます。二つ目は、歴史の中で営まれたことを語ることは、その歴史状況をひとつのシステムとして総括することになるわけだけど、そのシステムの延長上の結論がとりあえず見えていること、それが狭義の歴史研究だと思います。なぜなら、歴史的な見通しで現状を語ることは非常に難しいからです。今では学会で、戦後が歴史研究に入っていますが、僕は、言ったことが明日ひっくり返ってしまうかもしれないようなことには携わりたくない。ですから、私の研究テーマは、十九世紀の西洋です。

経済史は理論もやんなきゃなんないし、事実もつきつめなければならぬ

西川／僕は、あんまり魅力を語るというのは…。というのも、経済史研究はいくつか手順があるわけで、まず、事実をきちんととりだすという実証という作業をしなくちゃならない。しかも資料がひとつあったからとしても、それがそのまま事実じゃないんで、いくつかの資料を照らし合わせて事実を確定しなければならぬ。事実を客観的にみるにはそれでも不十分かもしれないけれど、とにかくその作業がひとつある。そして、今度はその事実を一つ一つ積みあげていく。歴史は結果がわかっていますから、事実をつなげていかなければならぬ。関係ないものを捨てながら、どういふふうにつなげていくか、過去の結果の中で、ひとつひとつ無限にある事実のなかから重要な事実をとりだして、そして、最後には、動きを理論化しなきゃならぬ。ですから、経済史の研究は理論もやんなきゃなんないし、事実もつきつめなければならぬ、と大変大きい研究労力が必要なジャンルなんで、魅力というよりは大変さを感じてます。若い時には、いろんな資料の比較ができたけど、年をとってくると持続力がなくなってきて、資料をきちんと事実確定できない、という感じがして、若いうちにしかできないような感じ。年をとったら何をしようか、というふうには最近では考えてます。

市川さんなんかは、何時間も机に向かっていることができるかもしれないが、資料がいっぱいあるようなテーマは若いときでなきゃできないでしょうね。

市川／むしろ、資料がなくて抽象的なことを言うてしまうより、



埋もれてるのは楽しい、と思いますけど、ただ資料から出発して研究する、というのは、批判があり、研究が蛸壺化する、という批判につながるのも当たってます。

西川／資料はあるだけあって、その資料に何の価値があるのか、整理してはじめて価値が生み出されるのに、資料があれば、何かできる、という研究方法上の勘違いは最近の動向にありますね。ま、いずれにしろ経済史研究は大変ですよ。

歴史の面白さは個人的なもので、自分でぶつかないと

西川／研究の面白さ、というものは学生にはすぐわからないし、歴史の面白さは個人的なもので、自分でぶつかないと。理論とか政策研究なんかではアイデアとか魅力のあるテーマがあったりするけれど、歴史にひき付けられるような魅力なんて、どうということなんだらう。たとえば、中小企業研究なんかでも、歴史的に分析すると、かえって面白くないんじゃないかな。

市川／そうですね。今、産業革命研究に対して、それに反発する形で在来産業研究があって、そういうのが80年代ぐらいまでずっときて、で、そこからじゃどうするか、という点で結論みたいなものが見えていないですね。在来産業がたくさんあったんだよ、という、産業革命研究で見落としているのがあるんだよ、という話はいんですが、じゃ、日本の経済の発展の中で、在来産業はどう位置づけられるのか、どうも明確になっていないんじゃないか。一方で、在来産業に経済発展の面をみる研究もあり、紡績工場だけじゃなくて在来産業の工場もあって、従事する人口も多かった、そしてそれが成長の軌道にあって、現在に続いている。コンビニなんかの歴史的背景の一つに、なぜ、日本には零細なものが残るのか、その底流に流れているものとして、大規模でうまくいかないものという論理を引き出そうとしている。あくまで、在来産業の力学で説明しようとしているのは面白いと思います。

西川／じゃ、なぜみんなやっていないんだらうか。やっぱり、やってみてでなきゃ面白さはわからないのかもしれない。アイデアはおもしろいけど、相手も説得できるような論理の構築も、また、資料分析というファインディングも必要だ、と言うと若い人にはかえって魅力がなくなるかもしれない。

▲太田和宏 教授

とにかく、魅力だけで研究

しているわけではない。例えば今道州制とか導入されようとしており、北海道に駐留していた軍隊の動向も問題になっていますが、そんなことの歴史をさぐり、占領軍はどう考えて、どういった経緯があったかについて調べる、そんなテーマは魅力があるのかな。そんなことより、北海道の活性化につながることをやったほうがいいよ、という人もいる。だから在来産業なんかの研究にも同じことが言えるかもしれない。それにテーマを選ぶには、どっかカンよさがある。たとえば、織物じゃなくて、そこらの酒屋でもいいんだらう、ともならないし…。

市川／材料を選ぶのは、なかなかむずかしいですね。

西川／かなりのカンと訓練が必要です。いっぱい資料をみて、さてどうしようか、というのでは歴史研究は薦められない。

歴史を見る目そのものが歴史に規定されている

太田／僕は市川さんとは育った環境も違うし、日本のことをやっているのと外国のことをやってるのとでも異なっていますし、特に資料の点では外国史ではその国の人に太刀打ちできない。むこうの研究者は三年五年とアルヒーフに埋もれることができるわけですから、資料へのアクセスの点で外国研究史は違う。

でも、僕は、自分は究極のところ何を知りたいのか、ということが研究者にとって一番大切なことだと思うから、その知りたいことを知ればいいわけです。で、外国のことで僕にとって知りたいことを誰かが論文に書いてあれば、アルヒーフのなかに自分が閉じこもって埃塗れになる必要がない。もちろん検証の作業は残りますけど。外国研究史は、僕は一次資料に必ずしもこだわらなくてもいい、と考えています。

それで、研究動向ということでは、僕が思うには、何を知りたいか、ということと歴史を見る目というの関係がある。まず、何を知りたいか、ということは分業の関係になっていて、分業で興味を持っていけばいい、と考えてます。だから興味の対象は、在来産業でも、西川先生がやってきた大きいメインストリームのテーマでもよくて、小さいから意味がない、とはいえないし、いずれのテーマも分業のひとつとして価値はある。

それで、一人の人が研究生活できるのは三十年か四十年で、その中で時代にマッチした研究テーマを選ぶのが難しい。一人の人の研究テーマは二つか三つで、少ない人は一つです。しかも歴史を見る目そのものが歴史に規定されている、つまり、その時代特有の関心に研究者のテーマも縛られる。で三十年も研究すると、時代が変わるので、それで新しいテーマにのる、というのもあれば、30年前の時代の研究関心を守り続ける、というのでもかまわない、と思います。自分が若かった時代に制約され続けてもいい。最近、藤田省三氏の追悼文章の中で、彼が最近の若い人とは話が通じない、若い人の研究関心をフォローできる状況には無い、と発言したのが紹介されていました。私は古い人間で、古い関心しかない。でも若い研究に近寄ろうとも思わない、と言っている。その人の時代を生きた人間のままであって、それでいい、というのには私は親近感を感じています。一方で新しい動向、着想もでてくるし、それに乗っかってもいい。それは、個人の好みの問題だと思います。

西川／好みでやっていいんだらうか。そういうことを。

太田／自分のために勉強する、それだけでいいのだから、という問いは常にあるが、でも、歴史による制約というのはいかんともしがたい。

過去から見据えていく人も必要



▲西川博史 教授

市川／たとえば、私と一緒に研究していた人が、茨城県の干拓の農場に行つてそこの農場主に会った時にこう言われたんです。農業主にしてみれば、われわれのような研究者が農業の経営について、こういう経営をしてこうだった、とか勝手にいつてるように思える。で、その農場主から、じゃ、おまえ達に農業がわかるのか、と、こう言われた時にその人は、逆に、では当事者であるあなたは帳簿をみて自分の経営をずーと溯つて把握しているか、その場その場の対策に追われる中で、そんな時間ありますか、と問い返したんです。われわれは、フリーになって資料を整理し直し、当時の人の資料をみて、それが一体日本の農政でどう位置づけられるのか、そんなことを考えている余裕があなたにはありますか、と言ったんです。こういうやりとりの中で正直僕は、自分が救われた。日々院生で暮らしてて、俺は無駄飯食つてるだけじゃないか、と思つていましたが、世の中こういう人もいていいかな、カレーライスには福神漬も必要だ、というふうに、ある程度そういう人もいていいんじゃないか、と。

もしかしたら、これだけ農業人口が減少すると、おまえが農業をやれ、と言われたら、どう答えていいかはわからないし、農業問題、環境問題を何とかするという人間がでてくるのは重要だけど、それを過去から見据えていく人も必要なんじゃないか、と思います。

もう少しはめをはずして、自由に、野心をもって物ごとを考えてもいい

市川／この一年間、正直、赴任して思つたのは、私が想像していた以上に北海学園経済学部の学生はまじめだな、と。そして、非常に出席率が高く、それ自体はたいへんすばらしいことだと思います。きちっと知識を吸収したい、という姿勢がある。でも、とにかくノートをとり、板書したことをすべて書かないと不安になってしまう、出席をとってください、なんてことを言う人もいる。試験に自信ない人が、出席をとってほしいと思つてるみたいですが…。私は、歴史を学ぶ意味の一つは、考える材料を得ることにある、と思つているので、それについてみなさんにも自由に考えて欲しい、そして私は、考えるツール、材料を与えられればいい、と思つてます。

テストの答案でも、授業でやった内容にかなり自由に書いてもらう欄も作つたんです。破天荒なこと書いてもいいですよ、という出題をしたんです。一言一句覚える必要もないし、受験の「歴史」というイメージを変えてほしい、知識を材料としてそれをもとに考えて欲しい、というのを重視してやってきたんだけど、なかなか…。小林一三の私鉄経営とか、デパートの上に食堂をもつてきて、そこに行くシャワー効果とかがある、とか具体的な話には興味をもつて食いついてくれるけど、もう少しはめをはずして、自由に、野心をもって物ごとを考えてもいいのにな、と感じました。

太田／僕は、ここ数年、4月の最初の授業で、大学でフェイストゥーフェイスで話を聞くことの意味を学生諸君に話すんだけど、そこで一番大事なこととして強調するのは、僕という個人がどういう人間であり何を考えているのか、どういうことを勉強しようとしてい

るのか、を理解することだ、ということです。いいわるいは別として、生身の人間が話しをするのだから、そういうことをやらないと、意味が無い。で、どれくらい理解したか、試験にだすとほとんど理解されていない。3-4年前に、ホブズホームが『20世紀の歴史』の中で、「今の若者は、どんな時代の若者とも異なっている。今の若者は過去と切れている。過去に対する関心が無い」と論じている。こうした若い人に過去の授業をするほど大変なことではない。

教育と研究が離れていく

西川／僕は、大学は教育と研究の場だ、ということがどれくらい達成されているのか、といつも考えさせられます。今の教育と研究の中で、教育もたいへんです。昔は、教育は研究していることをテーマ別にして教えていました。特に北海学園は3人担当者がいたもんですから、田中修先生（故人）は幕末から明治中期、長岡新吉先生が明治中期から第一次大戦まで、はくが第一次大戦から第二次大戦末まで、

▲市川大祐 講師

と相互に話し合つてやつてました。経済史・経済論をテーマ別で授業がやれ、「綿業帝国主義」では何が問題で、どういう組立て、どういうテーマが残っているか、を1年間で説明し、当時の学生は興味を持ってくれ、今でも卒業生とその話をして楽しいです。で、その次は、戦後占領期のアメリカのアジア政策について、それを整理して、どうして変わったか、単に冷戦だけでない論理があつたのでは、とかの研究の中身を講義でやって理解された。

でも今は、アジア間の賠償問題、占領期と戦後の賠償は違う、というようなことからやっているんですが、この研究を手がけた頃から、そういうテーマに講義では学生が興味をもたなくなつて、逆に教科書をやってくれ、と学生から言われる。昔は、大学の先生がそういうことをやると馬鹿にされたけれど、歴史の勉強で高校の教科書のようなことをしなければならぬ。

そうすると、教育と研究の関係はどうなるんだらうか。高校の内容をするのだったら、かつての大学じゃなくなつてしまうんじゃないか。でも、かえって今はその方がいいのかもしれないし…。とにかく私にはわからない。研究したことをかみ砕いて説明するのが講義なのか、高校のような内容を教えるのが教育と研究の場としての大学と言うのでしょうか。大学をどういう風に教育の場とするのか、なかなか難しい問題です。

太田／僕のところでは、キンドルバーガーを読んでいましたが、来年は『欧州共通教科書』にしようか、と考えてます。研究の概説書か、高校の教科書か、なかなか難しい問題です。

西川／僕は、ゼミは2時半からずーと遅くまでやりますよ、と言つてやってきましたが、学生がだんだん来なくなる。北海学園で身についたこと、経済学の分野で理論でも経済史でも、なんでもいいから言つてみて、いっても言える学生が少なくなった気がします。ケインズはこういう人だ、とか、大学で経済を学んでプラスアルファになったこと、とかなか言えなくなった。発表する、ということも含めて、力が弱くなっている感じがします。大学における教育についての課題は大きいと言えるでしょうね。

(この対談は2004年2月3日に行われました。)

北海学園の近所で過ごした少年時代

小中学校は豊平小学校と八条中学校に通っていたので、放課後に北海学園のグラウンドでサッカーや野球をやっていました。もちろんその頃は十数年後にそこに勤めるようになるとは思っていませんでした。今でも大学の近所を散歩すると幼馴染の家を見つけたりします。

中学の時は3歳年上の兄の影響でジャズを聴き始め、同時期に母に感化されたこともあって映画好きになりました。中学3年の時にビートルズが来日しましたが、僕はアニマルズの「朝日のあたる家」のようなブルースっぽいものが好きでしたね。

高校進学の際に引越することになったのと、何となく自由な校風に惹かれたこともあって西高を選びました。世界同時多発的に起きた大学紛争の時期で、高校でもデモに参加する人もいましたが、僕はノンポリで内外の小説を読み耽っていました。勉強は駄目で化学は赤点、英語はまあまあでしたが、シネマテーク（映画鑑賞団体）でゴッタルやデュービエに触れながら、高3の期末試験の後にアメリカン・ニューシネマの『卒業』を見たこともよく覚えています。

暗闇を彷徨った大学・大学院時代

一浪して北大の文類に入学し、2年の時に英文科に移行しました。当時は1年半教養部に在籍した後、2年生の2学期から経済学部・法学部・文学部・教育学部のいずれかに学部移行するという方式で、その半年は同時に週2回教養での授業を受けました。つまり2年の後半は教養と学部がダブっている時期で、これは今でもいいシステムではないかと思っています。学部は何となく英文科を選んだのですが、教養時代に西脇順三郎という英文学者の詩が好きだった事、教養英語の授業で取り上げた『ハムレット』、『船出』（ヴァージニア・ウルフ）が印象に残っていた事も選択の理由の一部ですね。そこでは尊敬できる先輩に出会えてとても幸運でした。一緒に詩の同人誌を作ったり、輪転機で個人詩集を作ったり、すっかり文学青年をやっていました。同時に映画館の暗闇からジャズ喫茶の暗闇へと彷徨っていた記憶があります。

4年の秋になって教育実習（写真はその時のものです）も終わり、教養や学部の仲間もそれぞれ就職を決めたのに、僕は何も考えていませんでした。それで何となく大学院を受けたのですが、目的意識を持たずに進学するとひどい目にあうという典型的なケースで、2年間の修士課程に4年かかり在籍の最長記録を作ってしまった。たいした経済的余裕もないのに両親には迷惑をかけてしまったと今でも後悔しています。



教育実習の時の教え子と一緒に

北海学園に勤める

大学院をでて翌年に運良く北海学園に採用となり、1980年28歳の大学講師誕生。しかしここでも目的意識のあまりない、頼りない教師であり続けた30代でした。大韓航空機事件のあった1983年31歳の時に初めてアメリカに行き、オハイオ州クリーヴランドの近くにあるアッシュランド・カレッジで2カ月の語学研修を受講。天安門事件のあった1989年には北海学園の提携校であるカナダ・アルバータ州のレスブリッジ大学で交換教授として4カ月間日本文化を教えました。

1994年に母を亡くした後、2年後の1996年に結婚をしてすぐ1年間の在外研修に出発しました。アメリカ文学・アメリカ文化を専攻しているため滞在地はアメリカにしようと思いましたが、元々は英文学をやっていたということもあり、英米折衷的に8カ月間ペンシルヴァニア大学、残った4カ月をロンドン大学キングス・カレッジで研修することにしました。ペン大学の所在地フィラデルフィアは独立宣言を発布した由緒ある都市で、短期間アメリカの首都でもありました。ロンドンではダーウィンやマルクスも利用したと言われる大英博物館の由緒ある円形閲覧室で勉強をすることができました。

文部省（当時）による大学設置基準大綱化が1991年に実施され大学も教養部解体が進み、1998年から3年間共通教育・研究センターに所属。そして2001年経済学部にも所属するようになった時に半年間の在外研修の機会を再び与えられ、ニューヨークのコロンビア大学で客員研究員として研修してきました。ブロードウェイの劇場や、ジャズ・クラブに歩いて行く事ができるアパート（1LDKの小さい部屋なのに家賃30万！）に住み、最後にワールド・トレードセンターへのテロ事件に間近で遭遇しました。その後のアメリカ政府・社会のありようを見て、アメリカへの見方が変わった大きな体験でしたね。

何を学び、どう教えるか

共通教育で語学を教えている人間というのは、担当している科目と自分の研究（文学を専攻している人が多い）との乖離に常に悩んでいます。僕の場合は専門として研究しているのはアメリカ文学・アメリカ文化なので、アメリカ文化を語学としての英語を教える内容にリンクさせようとしています。

現在はアメリカ文化の中で映画・音楽・美術を研究していますが、担当している英語や現代文化論、外国文学では、学生に関心を持ってもらえるような内容とその提示の仕方に工夫をしているつもりです。

最後になりますが、2001年コロンビア大学在学中にニューヨーク通信を載せようと思ったのがきっかけでホームページを作りました。現在は文学・映画・音楽・美術の発信・情報交換を目的としていて、最近（2004年1月）大幅に更新しました。研究と授業と趣味を横断したものですので、多くの学生にも見てもらい感想を聞かせて欲しいですね。
(<http://www.elsa.hokkai-s-u.ac.jp/~honjo>)

【私の履歴書】

本 城 誠 二 教授

担当講義 ● 英語

PROFILE

- 1952年 3月9日札幌に生まれる
- 1970年 北海道立札幌西高等学校卒業
- 1975年 北海道大学文学部文学科英米文学専攻卒業
- 1979年 北海道大学文学研究科英米文学専攻修士課程終了
- 1980年 北海学園大学 教養部講師
- 1998年 北海学園大学 共通教育・研究センター 一助教授
- 2001年 北海学園大学 経済学部教授

主な論文

- 「出口なき探究——ポール・オースターのニューヨーク三部作をめぐる」『主題と方法』所収、北海道大学図書刊行会（1994年2月）
- 「ハードボイルドにおける家族という神話」『北海道アメリカ文学』第14号（1998年6月）
- 「都市文学としてエルロイの『LA4部作』を読む」『北海道アメリカ文学』第16号（2000年6月）
- 「ヒップホップという亀裂」『ポストモダン都市ニューヨーク』所収、松柏社、2001年11月

趣味

読書、映画鑑賞、音楽鑑賞、美術鑑賞、テニス、(酒)



SEIJI HONJO

【学生諸君へ】

英語の教師として言わせてもらうならば、今までの自分の世界観を覆すような刺激的な英語のテキストを読んでほしいと思います。外国語学習が面白いのは、母国語で出来上がっている自分の世界をいったん外側から見る事ができるからです。多様な世界の存在を知り、さらに多様性こそが自然である事を知る。つまり絶対的に見えていた自分の世界に対する認識の相対化が外国語を学ぶ醍醐味の一つだと思います。現代文化論でアメリカ文化を学ぶ時も、アメリカという他者・外部を知る事によって自分の世界を拡げようという風に考えて欲しいですね。

